

農林水産大臣賞受賞

「農」を核とした観光農村づくりを目指して

おおはらさと
受賞者 大原里づくりトライアングル
(京都府京都市)

■ 地域の沿革と概要

京都市左京区大原地域は、京都市の北東部に位置し、京都駅から約16km、車で約1時間の距離にある。比叡山のふもと、周囲三方を500～700m前後の急峻な山々に囲まれた、標高約200～300mの盆地で、中心部を北から南に1級河川高野川が流れている。気候は夏に雨が多く、冬に少ない瀬戸内式気候と、三方を山に囲まれているという地理的特徴のため寒暖の差が大きい内陸性盆地気候の両面を有している。

山裾には農村集落が形成され、豊かな自然と人々の生活の中で育まれた里山に加え、石積み畦畔で形成された棚田が多くあり、それらが民家のたたずまいと一体となって、四季折々の美しい田園風景・棚田景観を形成している。

■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

農業と観光が連携した朝市などの開催や、地域特産品の「しば漬け」の原材料となるシソの生産などが行われている。シソ畑や水田、コスモス等の景観作物の栽培が景観形成に寄与している。

大原地域には三千院や寂光院などの歴史的・文化的資源があり、その周辺の山林は歴史的風土特別保存地区に指定されている。それらの資源と豊かな自然環境とが調和した田園風景により、観光農村として、毎年多くの人々が訪れている。また、地域環境を長年守り続けてきた地域コミュニティが根付いている。

第1図 位置図



第1表 地区の概要

事 項	内 容
地区の規模	集落の集合体
組織の性格	機能的な集団等
人口等	総人口 2,093人 総世帯数 632戸
農業経営体数 (内訳)	農業経営体数 214経営体 個人経営体数 212経営体 団体経営体数 2経営体 (内、法人経営体数) 2経営体
農用地の状況 (内訳)	総土地面積 5,001ha 耕地面積 76ha 田 71ha 畑 4ha 耕地率 1.5% 一経営体当たり耕地面積 0.4ha

注：四捨五入のため、計と内訳が一致しない場合がある。

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

大原地域は、史跡・名勝と、農村景観・環境を観光資源とする観光地であり、道路の改良や交通の発達により、生活環境の利便性は向上したものの、生活スタイルが観光業にシフトし、伝統的な農村風景や民家の景観に変容を及ぼした。これにより、大原地域独特の地域イメージ（風情）が薄らぎ、これに 1990 年代の経済不況が重なり、年間の観光客数が減少した。

さらに、地域内在住の若者が都市部へ流出するなど、大原地域の人口は、1965 年の 2,666 人をピークに減少傾向になり、その結果、少子高齢化・過疎化が進み、農業者の高齢化や後継者不足が深刻な問題となった。

また、狭小な農道や水路の老朽化、下水処理施設が未整備であることなど、農業生産基盤や生活基盤等の整備や農地利用集積の遅れ、獣害の深刻化などにより、地域の農地は、耕作条件の悪い農地を中心に耕作放棄が進み、農業資源の管理不良や農村景観の荒廃が課題となっていた。

そのような中、農家を主体とする地元住民が危機感を強め、1999 年に「大原ふれあい朝市」の取り組みや獣害防除柵の設置、農作業受託などを行う「大原農業クラブ」が発足したことをきっかけに、様々な資源保全活動を開始した。2000 年には大原学区自治会の呼びかけにより、大原地域の良さを残していくため、農業、観光、生活環境面などの各種課題に一体的に対応する組織を作るため、資源保全活動に取り組む地域内外の個人や団体が中心となり、「大原の里振興協会準備会（以下「準備会」という。）」が発足した。

その後、「準備会」で地域の課題解決に向けた話し合いを重ね、関係団体が連携し、これらの課題に継続的に取り組んでいく母体として、2001 年に「京都大原里づくり協会」が設立された。また、2005 年に「京都大原土地改良区」（以下「改良区」という。）が設立され、土地改良施設の維持管理や農業生産基盤整備事業が実施された。

このような経過があり、2006 年に「改良区」を事務局とする「大原里づくりトライアングル」（以下「里トラ」という。）を設立し、「京都大原里づくり協会」などの関係団体がそれぞれ実施していた資源保全活動を、より一層地域一体的・網羅的に取り組むこととなった。



写真 1 左上：春（すもも）右上：夏（赤紫蘇）
左下：秋（彼岸花）右下：冬（雪景色）

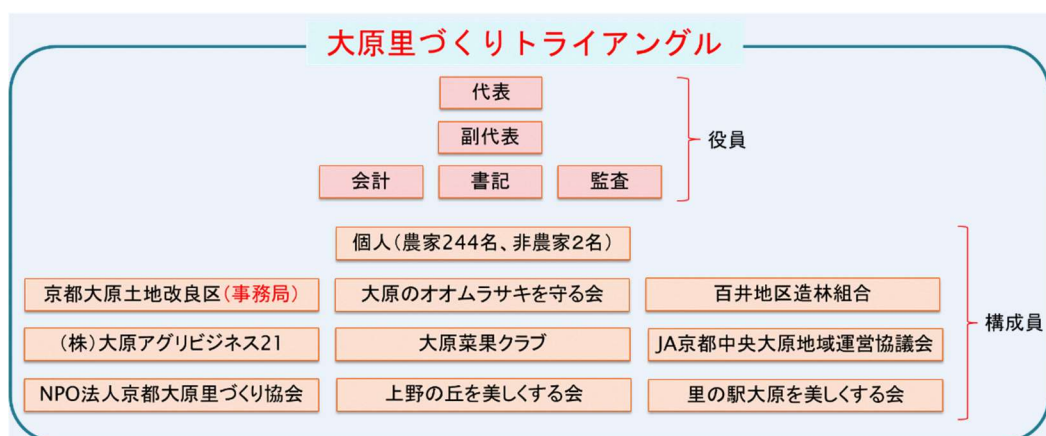


写真 2 獣害防除柵の設置

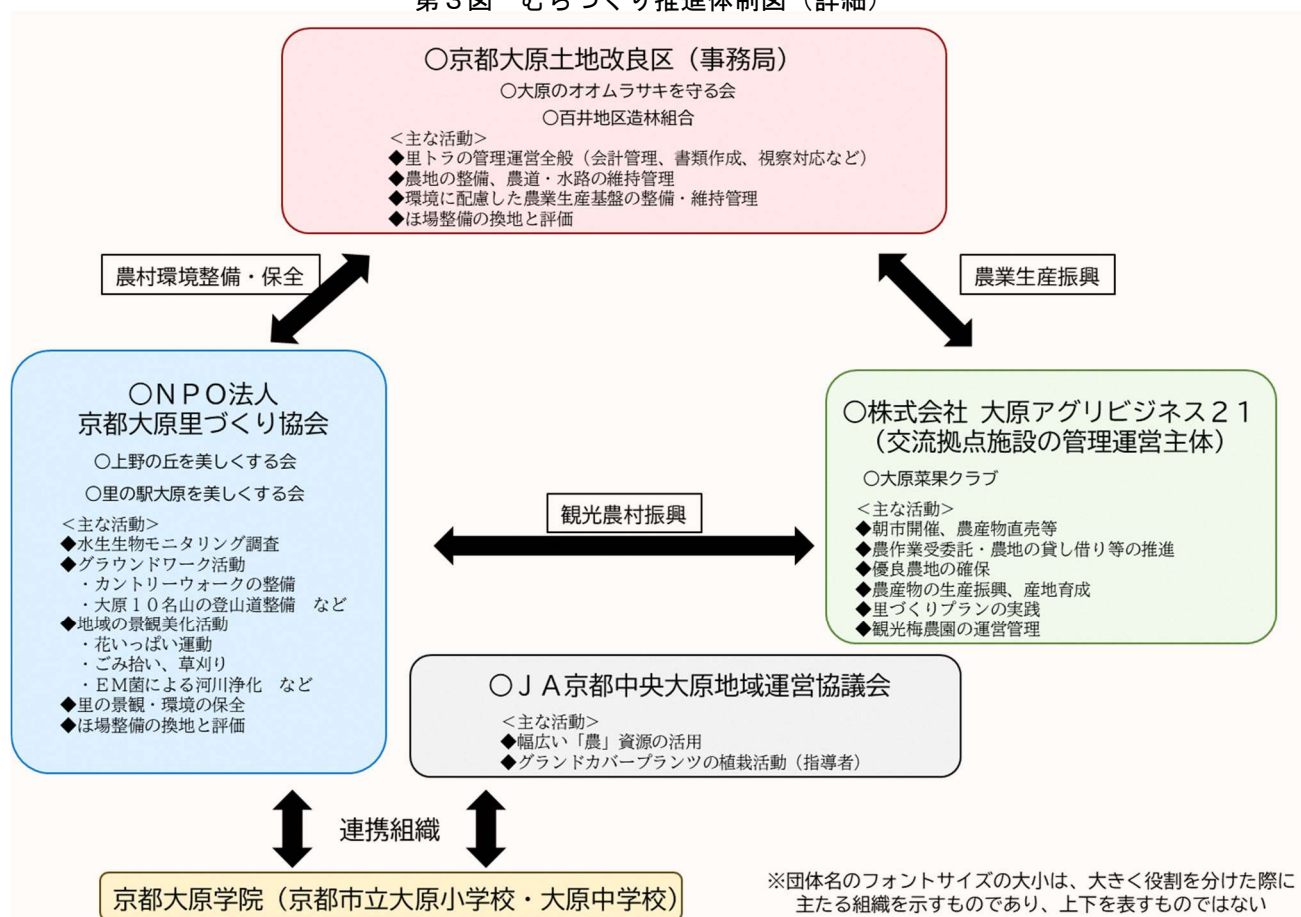
(2) むらづくりの推進体制

「里トラ」は、代表のもと、副代表1名、会計1名、書記1名、監査1名で構成されている。構成員は個人と団体があり、個人は農業者が244名、農業者以外が2名、団体は「改良区」を含む下表の9団体がそれぞれ担当事業に取り組んでいる。農業団体だけでなく、非農家組織も含む地元に着した既存の団体により構成されているため、情報の共有化や事務の効率化が図られている。地域に馴染んだ団体が住民に呼びかける影響力は大きく、事務局である「改良区」が担う農地整備や農道・水路の維持管理にとどまらず、「農産物の生産、販売」や「農村景観・環境の保全管理活動」に地域住民が一体となって取り組んでいる。

第2図 むらづくり推進体制図（概要）



第3図 むらづくり推進体制図（詳細）



■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

大原地域では、地域を構成する13町（井出町、上野町、大長瀬町、大見町、尾越町、草生町、古知平町、小出石町、勝林院町、戸寺町、野村町、百井町、来迎院町）の農家組合役員や農協の地域運営協議会などの役員を兼任されている場合が多いため、それぞれの団体との連携がスムーズで、毎年冬に実施する「農の一斉大掃除」（草刈り、排水路の泥上げ等）など、地域活動の運営を協力して行うことができている。

また、大原自治連合会と連携して「大原里づくりプラン」を2003年に策定（2005年に改訂）し、農業振興だけでなく、地域インフラや教育・子育て、景観・観光事業の整備、地域の安全・安心などに関する課題解決策を具体化した。

このほか、京都大原学院（京都市立大原小・中学校）と積極的に連携して活動している。水生生物のモニタリング調査は、ほ場整備が自然環境に与える影響の調査を目的として、水生生物を指標として水質変化を観察し、2005年以降、京都大原学院前の高野川や、宮川などを活動場所として水生生物の生息状況を毎年調査している。

また、2005年に京都大原学院の小学生が通学途中に国蝶オオムラサキの翅（はね）を見つけたことをきっかけに、大原地域での保護活動が始まった。飛来場所や越冬幼虫の調査、飼育網室での越冬幼虫の保護、成虫の放蝶会などを毎年行っており、こうした保護活動を地元の小・中学生と一緒に行うことで、地域の将来を担う子どもたちの環境意識の向上と、大原地域の農村と自然環境に対する保全意識の醸成に寄与している。

2. 農業生産面における特徴

(1) 生産、販売

2008年に、「里トラ」の構成員である「(株)大原アグリビジネス21」が運営する「里の駅大原」が開業した。地域の多くの農家が、米、シソなどの野菜や花、もち、しば漬け、ジャムなどの農産加工品を出荷しているほか、遊休農地対策として開設した観光梅園の梅も出荷されている。

地元の新鮮な野菜を販売する旬菜市場では、生産者の顔写真と名前、主な出荷物、生産している場所などを明記した「出荷者シート」が掲示されており、消費者が生産者のリピーターになることができる工夫が施されている。また、毎週日曜日には「大原ふれあい朝市」が開かれ、大原産の野菜や加工品等が販売されている。

そこでは、生産者の顔が見え、出荷へのこだわりを感じることができるため、一般消費者だけでなく、素材にこだわる料理人に「大原の野菜」として評価され、固定客の確保につながっている。



写真3 ふれあい朝市

(2) 生産力の向上、生産基盤の整備

2006 年度から 2011 年度まで、「改良区」が事業主体となり、農業生産基盤の整備事業を実施した。14.4ha の区画整理等を行い、排水性の向上による地場加工用野菜や朝市向けの新規作物の作付けが図られるなど、営農環境の改善に取り組んだ。事業完了後も、多面的機能支払交付金事業を活用し、農道の草刈りや水路の泥上げなどの維持管理をはじめ、農業用施設の長寿命化にも取り組んでおり、老朽化が進む農業用施設の補修点検や更新を継続的に行っている。

(3) 後継者の育成・確保

地区内外から 19 名（うち 2 名は女性）が新たに就農している。このうち、2016 年度以降の新規就農者（経営開始資金受給者）は 6 名（うち 2 名は女性）で、6 名全員が地区外からの就農である。新規就農者の多くは、1 農家当たり露地 30a 程度で、少量で多品目を栽培し、「里の駅大原」や「大原ふれあい朝市」へ出荷している。新規就農者のうち 9 名は家族で大原地域へ移住しており、7 組の夫婦は農作業や朝市等への出荷を共同で行っている。このような若手農業者たちは、自身の営農や育児などに忙しいが、そのような中でも草刈りなどの保全活動への理解が広がり、参加する農業者は増加している。例えば、毎年実施している「農の一斉大掃除」について、2021 年度の参加者 25 名のうち 9 名が若手農業者であった。

なお、「里トラ」は、草刈りや水路の泥上げなどの実施時期を農閑期にして広く参加を呼びかけるなど、若手農業者が活動に参加しやすくなるよう工夫している。多くの若手農業者に活動を経験してもらい、いずれは「里トラ」の後継者となり、また、地区の農業の担い手となってもらいたいと期待している。

3. 生活・環境整備面における特徴

(1) 資源保全の取組

「里トラ」は、集落の中心部に位置しながら長年耕作されず、地域景観を悪化させてきた遊休農地約 30 a を開墾し、観光梅園として再生させる活動や、農地や高野川河川敷に侵食する放置竹林の伐採などの活動に力を入れてきた。観光梅園には、地域住民とともに梅の苗木を植え付けた。その結果、農村景観を損なっていた遊休農地が解消され、地元住民に大変喜ばれるとともに、「里トラ」の存在と資源保全活動の大切さの認知に寄与している。



写真 4 観光梅園づくり

また、景観・観光の整備として、「大原里づくりプラン」に基づき、バスターミナルや観光駐車場周辺に大原のイメージにふさわしい看板を設置し、下水道工事の進捗に合わせた三千院や寂光院付近の国道の歩道のカラー舗装やガードレールの美装化などを行っている。

資源保全活動として、水生生物を指標とした水質変化の観察と、区画整理等が自然環境に与える影響の確認を目的として、2005 年から水生生物のモニタリング調査を実施している。高野川等から発見される水生生物の種類が調査当初の 2005 年と比較して約 1.5 倍に増加するなど、地域住民の水質保全に対する意識の向上に貢献している。

また、「大原のオオムラサキを守る会」が中心となり、2005 年から国蝶オオムラサキの保護活動として、飼育網室での幼虫の飼育及び管理作業などを行っている。

毎年6月にはオオムラサキ観察会・放蝶会、12月に京都大原学院の中学生と越冬幼虫調査を行っており、2022年度で放蝶会は15回目、越冬幼虫調査は17回目となり、長期継続した活動によりオオムラサキが見られる場所が増加した。大原に更にたくさんのオオムラサキが飛び交うよう、活動を続けている。



写真5 オオムラサキの放蝶会

(2) コミュニティ活動の強化

2006年に京都市内で唯一のモデル地区として農地・水・環境保全向上活動支援実験事業を実施したことにより、水路・農道などの農業生産基盤や環境に配慮した農業生産活動に対する農家と非農家との連携強化が図られた。

また、2007年度から農地・水・環境保全向上対策、2015年度からは多面的機能支払交付金事業を活用して農業用施設の長寿命化に取り組んでいる。2013年には、京都府農地・水・環境保全向上対策協議会優良組織表彰において京都府知事賞を受賞しており、「農」資源を活用した魅力ある観光農村づくりのための取組が評価されている。



写真6 農業用水路の維持管理

(3) 女性の活躍

2012年より、地域特産物の有効活用や独自性の高い加工食品の技術開発等を目的に、「大原料理コンクール」を開催している。昔から盛んである地域特産物の加工と料理を通して地域交流を深めるとともに、「食」文化を伝承する機会となっている。本コンクールの開催により、「京都中央農業協同組合大原支店女性部」の加工技術向上に寄与するとともに、同女性部が審査員として参画するなど、女性が活躍する場となっている。



写真7 大原料理コンクール